



## IBM API Connectによって社内向けにAPIを提供して 業務システムの開発効率を高め、API活用のノウハウを蓄積

通信事業者向けの通信インフラの構築からシステム・インテグレーションまで、多岐にわたる事業を手がける株式会社協和エクシオ(以下、協和エクシオ)では、各事業部門が独自に業務システムを構築、運用しており、開発効率の改善が課題となっていました。そこで、同社はIBM Integration BusとIBM API Connectを導入。社内各事業部門のシステムの機能の中で部門を超えて共有できる部分を共通部品化し、APIとして提供することで、各事業部門のシステム開発を支援し、全社のシステム構築の効率化を図っています。社内でAPI活用のノウハウを蓄積して、今後、グループ会社への展開や社外へのサービス提供も考えています。

**[導入製品・サービス]** ● IBM API Connect ● IBM Integration Bus



### 課題

- 事業が多岐にわたるために各事業部門が独自に業務システムを構築、運用しているが、全社的にみると非効率
- 事業構造としては似ている部門はあるものの、得意先の違いなどから業務レベルで違いがあるために、業務システムを共通化することは困難

### ソリューション

- IBM Integration Busを導入して連携基盤を構築し、社内システムの共通部品化に取り組む
- 各事業部門に共通部品を提供するためにAPIを活用するアイデアの実現を目指して、IBM API Connectを導入、APIのラインナップ強化に取り組む

### 効果

- 2018年3月をめどにAPIの提供を開始し、各事業部での業務システムの構築を効率に行える体制を確立する
- APIの効果を確認して適用範囲を拡大するとともに、そこで蓄積したノウハウをもとに外販体制を構築する

## 【お客様課題】

### 事業部ごとにシステムを構築 全体としての効率化が課題に

情報通信建設会社である協和エクシオのコアとなる事業は、通信事業者向けの通信インフラの構築と保守です。光ファイバー・ケーブルなど通信回線の工事からルーターやサーバーを用いたネットワーク設備の工事、そして携帯電話などのモバイル通信の基地局建設などを手がけています。

もう1つの事業の柱がIoTやICTのソリューション・ビジネスです。ネットワークからITインフラ基盤、ソフトウェア開発までシステム・インテグレーターとして事業を展開しています。多岐にわたって事業を展開していることから、基幹システムは全社共通になっているものの、業務システムは事業本部ごとに存在しています。各事業本部で独自にシステムを構築し、保守・メンテナンスまで各自で行い、使用するハードウェアやソフトウェアも事業本部ごとに異なります。当然、全社としてのIT保有コストは大きく膨らみます。

この状況は社内システムを担当するIT推進部の課題でした。協和エクシオ 理事で、IT推進部 IT推進部長を務める齊藤 洋氏は「特に通信インフラ事業は、事業構造として共通する部分が多くても、通信事業者ごとにビジネス面で違いがあるため、事業本部ごとに別々に業務システムを構築していました。こうした似ているけれども少し違うところをどう効率化できるかが、大きな課題になっていました」と話します。

通信インフラ事業にとって、最も重要な業務システムは工事管理システムです。工事管理システムは、工事の内容や進捗、設計図面、基地局などの情報を管理するもので、求められる基本的な機能は同じです。しかも、基幹システムに投入するためのアウトプットの形も決まっています。それを事業本部ごとに開発し、運用していることは非効率でした。

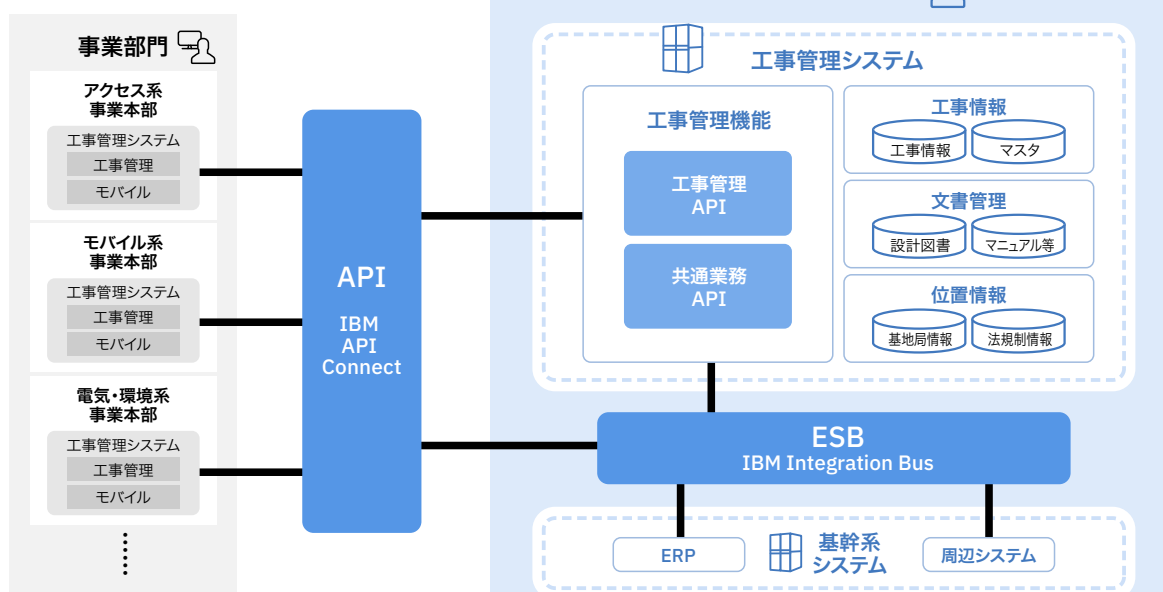
工事管理システム自体が事業本部ごとに存在することだけでなく、基幹システムとの関係も問題でした。「工事管理システムと基幹システムは、工事の案件情報を管理するという点

IBM Integration Bus  
とIBM API Connectの  
導入によって、期間や  
コストを抑えながら、  
繰り返しシステムの改善  
に取り組み、しかも変化  
にも迅速に対応できる  
ようになります。



株式会社協和エクシオ  
理事  
IT推進部 IT推進部長  
齊藤 洋氏

## 共通基盤システムイメージ



では同じですが、業務遂行と会計管理というシステムとしての目的が異なり、データも人手で二重に入力しています。これでは効率が悪く、ミスも起こりがちです。この状況を改善しようと、2015年ごろからESBによるデータ連携に取り組み始めました」(齊藤氏)。

## 【ソリューション】

### IBM API Connectを活用 社内で共通部品を使ってもらおう

ESB(Enterprise Service Bus)は、システムやアプリケーションが高速かつシンプルに相互通信するための連携基盤です。同社では2015年に「IBM Integration Bus」を導入して、ESBの構築に取り組みました。

「もともとシステム・インテグレーターとして、ビジネス・プロセス管理(BPM)の導入支援のビジネスを展開していて、エンタープライズ・アプリケーション統合(EAI)やESBの製品も扱ってきました。日本IBMのパートナーとしてIBM Integration Busの取り扱い実績もあり、製品として信頼できることは分かっていました」とシステム・インテグレーション事業を展開する協和エクシオ ビジネスソリューション事業本部 営業本部 ソリューションコンサルティング部門 ソリューションコンサルティング担当 担当課長の住吉 俊郎氏は、IBM Integration Busを採用した背景を語ります。

ESBの発想は既存のシステムをある粒度で共通部品化して、連携させようというものですが、新たな課題として浮上してきたのが、その部品を各事業部門にどう使ってもらおうようにするかということでした。この課題を解決するアプローチとして同社が目にしたのがAPIの活用です。通常は社外にシステム・サービスを提供するために利用するAPIを社内向けに使えないか考えたのです。

「ビジネスソリューション事業本部のメンバーが2017年3月にラスベガスで開催されたIBMのイベントに参加して、APIが急速に普及している状況を目の当たりにしてきました。そこで、使う側が自由にシステムを組み立てられるというAPIの使い方が、各事業部門への共通部品の利用促進に活用できるのではと考え、IT推進部にAPIの活用を提案してくれたのです」と協和エクシオ IT推進部 担当課長の下山 憲明氏は語ります。

この提案を受けて、IT推進部はビジネスソリューション事業本部と一緒に、APIを開発し、管理するための製品を検討し、最終的に「IBM API Connect」を選定しました。「選定の決め手はやりたと思っていた機能が全て揃っていたことで、なかでも最大のポイントは外部に機能を提供するのと同じサービス・レベルで、社内に機能を提供できることでした」と住吉氏は指摘します。

## 【効果/将来の展望】

### 繰り返しシステム改善に取り組める 俊敏性を持ったシステム基盤を

現在、IBM API Connectの導入プロジェクトは、IT推進部とビジネスソリューション事業本部との合同プロジェクトとして30名弱の体制で進められています。「メインとなるのはビジネスソリューション事業本部。社内でIBM API Connectの効果を確認しながらノウハウを蓄積して、社外にサービスとして提供していきたいと考えています。API市場は今後も拡大することが予想されることから、大きなビジネス・チャンスがあると期待しています」と住吉氏は抱負を語ります。

データベースとのインターフェースになるAPIなどはGUIの操作のみで作成できるので、IBM API Connectは生産性の面でも貢献しています。



株式会社協和エクシオ  
IT推進部  
担当課長  
下山 憲明氏

社内でIBM API Connectの効果を確認しながらノウハウを蓄積して、社外にサービスとして提供していきたいと考えています。



株式会社 協和エクシオ  
ビジネスソリューション事業本部  
営業本部  
ソリューションコンサルティング部門  
ソリューションコンサルティング担当  
担当課長  
**住吉 俊郎氏**

これまで構築してきたデータ連携基盤にAPIを加えることで、各事業本部はより簡単にIT推進部が用意した共通部品を業務システムに組み込むことができます。それぞれの業務システムの構築が効率化されて開発コストが削減されるだけでなく、データ連携の部分が標準化されることで、全社のシステムがよりシンプルな形になり、運用コストの削減も予想されています。

「今用意しているAPIの候補は100以上あります。2018年3月までには50くらいはサービスを開始したいと考えています」と下山氏は進捗状況を説明します。同社はまず、1つの事業本部に的を絞って、API化を進めており、効果を確認しながら、今後、他の事業本部にも広げていく計画です。

「IBM API Connectには全ての機能がオールインワンで揃っていて、簡単にAPIをつくることができます。その分、事業本部へのヒアリングに時間を割くことができている」と斉藤氏。「データベースとのインターフェースになるAPIなどはGUIの操作のみで作成できるので、IBM API Connectは生産性の面でも貢献しています」と下山氏は実装面からもIBM API Connectを高く評価します。

最後に斉藤氏は「現在取り組んでいるBPMは永遠のテーマです。これからも繰り返し継続することが大事。今回の仕組みができれば、期間やコストを抑えながら、繰り返しシステムの改善に取り組み、しかも変化にも迅速に対応できるようになります」と経営面からも大きな成果が期待できる点を強調しました。IBM Integration BusとIBM API Connectによって同社が手に入れようとしているのは、将来を見据えた柔軟なシステム基盤なのです。



株式会社 協和エクシオ

## 株式会社 協和エクシオ

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3丁目29番20号

<https://www.exeo.co.jp/>

1954年の設立から一貫して、情報通信インフラ構築の専門技術をコアコンピタンスとして事業活動を続けていることに加えて、長年培ってきた環境・土木技術や電気設備技術などを活用した環境・社会インフラの構築、運用の分野にも進出しています。さらに、ICTとソフトウェアを融合したソリューションや各種アプリの開発などにも実績を有し、今後、IoT分野にも貢献していきます。



©Copyright IBM Japan, Ltd. 2018

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21

このカタログの情報は2018年2月現在のものです。仕様は予告なく変更される場合があります。記載の事例は特定のお客様に関するものであり、全ての場合において同等の効果が得られることを意味するものではありません。効果はお客様の環境その他の要因によって異なります。製品、サービスなどの詳細については、弊社もしくはビジネス・パートナーの営業担当員にご相談ください。IBM、IBMロゴ、ibm.com、およびIBM API Connectは、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corp.の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。現時点でのIBM商標リストについては[www.ibm.com/legal/copytrade.shtml](http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml)をご覧ください。